



あらたなる希望の花を胸に秘め
—宮城女学校生徒による短歌の世界
(1910年～1940年)—

宮城学院女子大学 一般教育部准教授 栗原 健

青々とした松の木や、天までとどくやうなポプラの木や、銀杏櫻等の木にかこまれて、建つて居る赤煉瓦のスクール!! 之れは私共の大好きな学び舎で御座います。校舎の裏には、広い校庭が御座いますそして [ママ]、クローバーが生え茂る頃には、二百余の姉妹達が、暖かい春の日光を浴びながら、テニス、ブランコ、バスケットボール等の面白い遊びを致します。

テニスのお上手な四年級の S 様は、我が校に於ける運動家で御座います。又、熱心な姉様方によって催される秋の文学大会は、我が校の誇とする所で御座います。校長先生をはじめ、皆御やさしい先生方でいらつしやいまして、常に私共を、愛と、正義とを以つて、御導き下さいます。一日の業を始むる前には、是非神様に、『今日一日を罪少なく、清くおくらせて下さいませ。』とお願ひし、又、切に祈るので御座います。[略] 私はこんなに清い学び舎に学んで居る自分を、ほんとに幸福に思つて居ります。(澤口勝子「我が学校」)¹

文芸を愛する宮城女学校の有志によって結成された宮城女学校文学会は、1890 (明治23) 年以降、機関誌『宮城野』『萩の下露』『橄欖』を生み出して行った (この変遷の過程については、本誌収録の小羽田誠治の論考に詳しい)。ここには生徒・同窓会員等の手になる論説、随想、短編小説、戯曲、翻訳、詩、紀行、短歌、童謡、行事参加の手記、近況報告等が掲載されており、当時の在校生や関係者たちの肉声を伝える貴重な史料となっている²。

冒頭に掲げた一文は、『橄欖』創刊号に収録された2年生の作文である。書き方はこなれていないが、当時の少女小説を想起させる麗しい空間として自らの学校を表現したい生徒の意欲が伝わって来る。このような学校生活を送りながら、彼女たちの胸にはどのような想いが去来していたのであろうか。

本稿の目的は、『萩の下露』『橄欖』に掲載されている短歌をたどることにより、当時の生徒たちの日常生活と、そこで展開されていた心象世界を垣間見ることである。無論、こ

¹ 澤口勝子「我が学校」『橄欖』1号 (1921年)、21-22頁。

² 小羽田誠治「『橄欖』成立の歴史とそこに見る生徒の『自主』」本誌、5-18頁。『橄欖』各号の収録内容については以下に列記されている。佐藤亜紀「『橄欖』第1号—第21号における書誌および目次一覧」本誌、35-63頁。

うした作品は文芸創作であって、実際の生徒の体験や心情をそのまま活写したものとは限らない。単に個人的な情景を描いたもの、少女雑誌等に掲載されている挿絵や文学作品から想を得たものも多々あると考えられる。また、学校生活の喜びを詠んだ歌よりも心の葛藤や痛みを描いた作が多いのは、そのようなテーマこそ歌の材料としてふさわしいと考えられていたためであろう。題材に偏りがあることは否めない。

しかしながら、身近な者に読まれることを想定しつつ公刊された作品である以上、生徒たちが分かち合っていた想いや関心事、かくありたいと願う憧れの姿がここに表現されていることは確かである。心の断片を切り取ることができる短歌は、現在の SNS のようなつぶやきを伝える媒介であったと言える。或いは、自分が見せたいイメージを自撮りして公にすることに近いのかも知れない。ここから彼女たちの心性や美意識をうかがうことができる。

本稿では、「学校風景」「友情」「煩悶の情」「望郷の念」「死者を偲ぶ」「信仰と祈り」「明るい日常」「社会への反応」「幻想と恋」の 카테고リーに分けて、生徒たちの作品群を紹介していきたい。各歌の後には作者名、記載の雑誌（『萩の下露』は「萩」、『橄欖』は「橄」と表す）と号数、頁番号を付け加える。作品中の漢字は、読みやすさを考慮して旧字体から新字体に改めたが、仮名づかい、送り仮名は原文のままとしてある。繰り返しを示すくの字点は「／＼」「／＼」と表記した。なお、本稿で使用している各雑誌の刊行年は下記の通りである。一時期の間、年刊ではなくなっている。

『萩の下露』第2号（1910年 明治43年） 4号（1912年 明治45年 / 大正元年）

『橄欖』第1号（1921年 大正10年） 2号（1922年 大正11年） 3号（1923年 大正12年） 4号（1924年 大正13年） 5号（1925年 大正14年） 6号（1926年 大正15年 / 昭和元年） 7号（1927年 昭和2年） 8号（1929年 昭和4年） 9号（1930年 昭和5年） 10号（1931年 昭和6年） 11号（1932年 昭和7年） 12号（1933年 昭和7年） 13号（1933年 昭和8年） 14号（1934年 昭和9年） 16号（1935年 昭和10年） 19号（1937年 昭和12年） 21号（1940年 昭和15年）

【学校風景】

よく出来し今日の試験に身も軽くかへる家路の桃の花かな（川下美智子 橄14 82頁）

宿題をせずに寝た夜の夢路には必ず見ゆる先生の顔（伊藤京子 同）

そよ／＼と睡りをさそふ春風の吹き来るなり教室の窓（鈴木嘉子 同 83頁）

復習は床の中でと寝ねたれどたちまち夢になりけるかな（多恵 橄9 121頁）

目をとちて明日の宿題思ふ時のどかにひゝくピアノうらめし（篤子 同 120頁）

熱心な講義を外にしみ／＼と見入る蒼空のいと美しき哉（瑛子 橄2 46頁）

洩れて来る青葉の風の涼しさに今日の試験の苦勞忘れぬ（丹野静子 楸 16 25 頁）
聞く人の心々にまかせ置きてさりげもなしや寄宿舎のベル（そよ女 萩 4 16 頁）

いつに変わらぬ学校風景を詠んだ歌であり微笑ましくなるが、こうした日常をユーモラスにとらえた歌は少数である。歌材として卑近で美意識に欠けるものとされたのであろうか。恐らく、戯れに詠まれたために生徒の側も投稿するに値しないと考えたのであろう。最後の一首は、時刻を伝えるベルに追われて慌ただしく一日を過ごす日常を描いた作文に添えられたものである。

学舎や寮での何気ないひとときをとらえた作品は、抒情的で印象深い。ビジュアルで想像すれば、中原淳一や加藤まさをが描く女学生を彷彿させるものがある。

寒き夜にピアノを弾けばほのかなるいぶきにくもる白き鍵盤かな（美枝子 楸 9 120 頁）

心地よき球うつ音す小春日の日影さやかに我が頬に照る（工藤信江 楸 16 35 頁）

秋たちぬ吾や画筆の手をとめて静かに高き夕雲を見る（こほろぎ 萩 2 59 頁）

夕されば宿舎の窓にたゞ独りおち葉かぞへつゝ歌思ふ我（野ざく女 同 60 頁）

ローレイロすさみつゝ佇めばそこはかたなくくれそめにけり（S子 楸 1 58 頁）

トランプの獨り占ひにもやゝ倦みてハートの A をぞつと凝視（みつむ）る（渡邊智慧子 楸 8 64 頁）

もくれんの散りこし花の一ひらの香をなつかしみ本にはさみぬ（佐藤みわ子 楸 14 84 頁）

はてしなき心の幸を夢みつゝクローバさがすあはれ乙女子（佐藤てる子 楸 16 26 頁）³

静かにも澄める朝かな木犀のかほり流るゝ窓の髪梳く（黒蝶女 楸 21 13 頁）

素直な想いにクスリとさせられる作品もある。英子の歌は、誰しも身に覚えがある。瑛子の歌は、おそらく友人と喧嘩したか教師に叱られ、むくれていた時の体験なのであろう。

元日の初日の光身に浴びて今年こそはと力む我かな（英子 楸 9 121 頁）

人間というものはかくもやさしきかとひよつとおどろき面あげてみぬ（瑛子 楸 2 46 頁）

³ 実際に四つ葉のクローバーを生徒たちが探している様子を描いた文章が、『楸』第 1 号に登場する。「運動部報告」『楸』1 号（1921 年）、65 頁。

【友情】

学校生活において不可欠な要素が、喜びも悲しみも分かち合える友人の存在である。

撫子の露美しき朝の野を素足うれしみ君とゆくかな（虞美人草 萩 2 59 頁）

わが祈禱り友かなやみを癒すべき力あらか神よと泣きぬ（白鳩 萩 2 57 頁）

しろがねの水の中よりいづる月めで、笛吹く友とわが身と（ゆき子 萩 4 37 頁）

笑ふこと少なくなりし我故に友ももだして春の山行く（丘 榎 4 13 頁）

学校に一人淋しく急ぐ時道に逢ひたる友そうれしき（江子 榎 9 120 頁）

ソプラノで我のうたへば我が友はアルトで和する若草の野辺（丹野静子 榎 14 83 頁）

去年の夏友と遊びし砂浜の真白き貝もなつかしきかな（工藤信枝 榎 16 35 頁）

まなびやに三年のひまにむすぼれし友のなさをとはにおぼへん（及川トキコ 榎 10 138 頁）

この時期の少女小説等でしばしば描かれるのが、「エス」と呼ばれる生徒同士の友情である。「エス」は Sister の略であり、先輩生徒が後輩生徒と姉妹のような親しい関係となり、愛情の絆を深めることを指す⁴。『橄欖』第 5 号には、「江須愛」（「エス愛」の意であろう）なるペンネームを掲げた生徒が、親密な友情を詠んだ歌を投じている。

何ごとも言はずある時更によしたゞに瞳を見詰め笑めるも（江須愛 榎 5 21 頁）

はしたなき女ぞ我は君見れば胸によらずば慰まぬかな（同）

来む春をこよなく待つも君と我夜のまち歩む別れむ前の日（同）

珍しいのは、失恋をした友に向き合う悩みを詠んだ S（これも「エス」を暗示するのか、単なるイニシアルであるのかは定かでない）による一連の歌である。現実の恋愛沙汰を描いた作品を誌上で公にすることは考え難いため、想像上の光景を描いた歌なのであるが、実際にこのような体験をした生徒もいたことであろう。そのためか、ドラマの一場面のように真実味がある内容となっている。

失なひし戀を悲しむ友どちと河原に立ちて言葉もあらず（S 榎 10 137 頁）

あきらめてただあきらめて生きんなど友の語るにわれはもだしぬ（同）

⁴ 「エス」のイメージについては下記に詳しい。今田絵里香『「少女」の社会史』（頸草書房、4 刷、2008 年）、204-223 頁；稲垣恭子『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』（中央公論新社、2007 年）、94-114 頁。

恋さへもすて、嫁ぐといふ友の言葉かなしも河原に立ちて (同)
何事もみこゝろのまゝよ何事もなど云ふ私のくちびるさむし (同)

不在の友を想う歌は数多い。故郷に残して来た旧友、転居して学舎を去った親友は無論のこと、夏季休暇中の別離であっても友が懐かしく思われることに変わりはない。しばしば、友に手紙を書く場面や来信を待ち侘びる場面が描かれることになる。

事とはん空かけり来るかりがねよあづまの友はつゝがなくてや (野ぎく女 萩 2 60 頁)

またしても夢にあこがれ去り行きし友なつかしき灯ともしの頃 (宵待草 榎 9 119 頁)

とも／＼にあゆみし道を一人ゆき名もなき花に君をしのびつ (千葉綾子 榎 10 141 頁)

秋の宵窓をひらけば菊の香の胸にせまりて友の戀しき (某生 榎 13 81 頁)

停車場に友を送りし思い出のいとも淋しき五月雨降るも (佐藤光子 榎 14 81 頁)

春の日に野辺に立いでしみ／＼と遠く離れし友思ふかな (熊谷とし子 同 83 頁)

書き終へし友への便りだきしめて外にいづれば夜風身にしむ (佐々木節子 同 81 頁)

一枚の葉書の裏にその友の笑ふ顔さへ見ゆる心地す (ゆり子 榎 9 120 頁)

淋しさに古き手箱を取り出せば恋しき友の細き筆あと (きみ子 同 120 頁)

故郷の友の便りの封切ればほのかに磯のかほり漂ふ (S 榎 14 69 頁)

いかにせむ今日も今日とて待ち侘びし友の便のいつか来べきぞ (工藤信枝 榎 16 35 頁)

すれ違いや仲違いは友人関係においては付き物であり、トラブルを詠んだ歌も度々見受けられる。

もうこれから口をきかじと思ふ日に馬鹿にやさしく見ゆる友哉 (瑛子 榎 2 46 頁)

性故と思へど友の雑言を強く気にして涙する我れ (道子 榎 10 140 頁)

いさかいし後のしじまの寂しさよ夜空あふげば星一つとぶ (H・U 榎 10 140 頁)

良き友と仲互ひせし今頃はその淋しさに歌うたうなり (美秋 榎 11 96 頁)

けんかしたあとの寂しさ唯独り路の石ころけりつゝ帰る (戸田春子 同 96 頁)

思ふこと云はず語らずまさびしく別れし友のこのかなしさよ (同 97 頁)

たはむれのすぎて友をば泣かしたる後の心の深くさびしき (鶉橋かつえ 榎 14 81 頁)

我ならばかくはいはしと思ひつゝ、友の語るをきゝて居るかも（小島弘子 楳 16 25 頁）

吾を誣ふる言葉を聴けり穿てりと肯かれるが憎しと思ふ（和泉幸子 楳 21 22 頁）
人は只恨み悲しみ憤り斯くてぞ日々は過ぎ行くものか（同）

友の変化に寂しさをおぼえるものもある。そよ子の歌は、東京に行った友と再会した際の印象を詠んだのであろう。

ゆくりなく一とせ振りに相見れば君は都の少女なりけり（そよ子 萩 4 37 頁）
久々のともに逢ひてのよろこびに我ふみたれど友は笑はず（加藤清子 楳 14 83 頁）

出会いと別離を繰り返すことに倦み疲れた声も見られる。

会ふものは別るゝものと定まれる人の世の掬うらめしきかな（俊 楳 8 134 頁）

心を許せる真の親友がないことを嘆く歌も登場する。女学校を舞台にした少女小説がこぞって友情のうるわしさを称揚していた分、そのような体験を出来ずにいた生徒はプレッシャーを感じていたことであろう。

打ちとくる友持たぬ身のしみぐと淋しさしむる此の頃のわれ（H・U 楳 10 140 頁）
語るべき友みなければ青空を仰ぎてひとりおくれ毛をかむ（工藤信枝 楳 16 35 頁）

友情にどの程度理想を求めてよいものなのか。古山すみ江が書いた「日誌の中より」の末尾に付けられた議論（『楳欖』2号収録）には、彼女たちの相反する本音が現れている。

A「私は浮薄な友は必要ない、どうして友を信じて自分のすべてを語ることが出来やうか自分自身さへ分らないものが人の心を知ると云ふのは間違つて居る友を知ろうと思ふ前に自分自身を知らなければならぬ」

B「私にはそれが出来ません、余りに淋し過ぎます孤独の生活私には考へたくありません友に裏切られてどんなに苦しんでも私は友が欲しい」（楳 2 38 頁）

【煩悶の情】

上記のような交友関係の悩みとは別に、特定の原因も無く寂しさをおぼえて悩むこと、劣等感や孤独感に苦しむことも青春時代の一部である。やり場の無い煩悶の情を手早く表現するには三十一文字は格好の表現手段であり、こうした憂愁を詠んだ作品は多い。殊に、自らの「若き愁」を白く光る夕顔に比した「虞美人草」の一首は、なかなか情緒がある。

夕顔やほのかに白うわが若き愁にも似てうす闇に咲く（虞美人草 萩2 59頁）
かなしみの鳥はひまなくわが胸をやどり木として啼きぬ世は春（木蓮 同 58頁）
よもすがらねむりもやらずねやの中に物思ふころを落栗の音きく（野ぎく女 同 60頁）

思はじと文を読めども束の間も灰色の憂我を離れず（椰野葉子 楳5 22頁）
いたづらに成すこともなく去りて行く年を思へば涙ぐましも（加藤きよ 楳7 56頁）
悲しさにつと窓の辺に立よればかすかに揺る、紫陽花のはな（橘川静江 楳8 66頁）
憂愁にうちとざされし吾が胸のくらきにも似て迫る薄闇（W 楳8 64頁）
もの皆は幸の多くみえて唯一人うなだれて歩む正月の夜（同 64頁）
何がなく口とくことのいとはれて今日も淋しくほゝゑめぬ（同 65頁）
耐へかねて人をしのひぬ今更に乙女心のはかなさを知る（千葉綾子 楳10 141頁）
つかれたりあこがれもなく夢もなき深き眠りを我にあたへよ（美秋 楳11 95頁）
小夜時雨窓にうつ音の寂しさよ我が身我胸知る人もなく（戸田春子 同 97頁）
寂しさに河原に行きて慰めに砂一面に字をかきにけり（新妻勝子 楳14 83頁）
ひねもすを風吹き荒れて散り敷ける病葉のごと落莫たる心（和泉幸子 楳21 22頁）

童心を失いつつある自らを悲しむ歌も見られる。そよ子の歌では、変わりつつある自分の心とのコントラストとして、記憶の中で変わらずにいる幼馴染の友人を考えているのであろう。

一とせは一とせ毎に荒み行く胸になつかし幼な友達（そよ子 萩4 37頁）
あまりにも孝の心の消え果てて悲しく思ふ今頃の我（美秋 楳11 95頁）

何か衝撃的なことがあったのか、絶望の悲しみを書き連ねた作品も見られる。心の鬱のために朝起き上がることもできない若者がいることは、今日も変わらない。

生きの〔る？〕身の望なければ朝の日かがやき照れど起きたくもなく（くちなし 楳8 61頁）
吾胸は涙のうつぼ其涙こぼさじと今日もたへてたへたる（同）
幸福はつひに来たらずと云ひつゝも尚心秘かに待つ哀れさよ（渡邊智慧子 同 64頁）

自身の心や社会の姿に偽りを感じ、嫌悪感をおぼえることもある。下の3首目の歌は、明らかに与謝野晶子の「やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君」を意識している。学校で語られる高尚な道徳論と現実社会の実態との乖離に疑問をおぼえたのであろうか。

底知れぬ偽に染み底知れぬ我をも知らで人の道ゆく（菊地つね子 楸7 55頁）

悲しきは偽に泣く我心偽りてゆく人のすがたよ（同）

人の世の矛盾になきて人の世に道を説く人悲しからずや（同）

自らの姿に疑問を抱き、弱さを嘆く歌も存在する。

唯清く生きんとするは何故ぞ涙ぐましき此の頃の我（ゆり子 楸6 26頁）

いささかの事に涙す弱き我強くなりたし強くなりたし（工藤信枝 楸16 34頁）

泣くまじと唇かめど湧き上るこの胸ぬちの憤りかも（同 35頁）

上の3首を読んで思い出されるのが、『楸欖』第1号に掲載された聖書科2年生のT子による「断片集」の言葉である。聖書と対峙して内面を省みる聖書科生ならではの葛藤と見ることもできるが、心情としては上の歌の筆者と相通ずるように思える。今日も同様の想いを抱いている若者は少なくないであろう。

「自分はほんとうに仕様のない人間だと愛憎（想）がつきる。貧しいと思ふ。無能だと思ふ。ぶちたくなる。ふみにちりたくなる。けれどこんな小さな力で。こんな貧しい力で。人なみに『生きたい!』ともだえて、あがえ【い】てゐる事を思ふとそのいぢらしさに、泣かずに居られなくなる。」

「胡魔化す事はいけない事だ。胡魔化す事は恐ろしい事であると思ふ。けれどもしも胡魔化さなかつたら生きて行けない弱い事をどうしやう。」（楸1 37頁）

しかし、こうした心の淋しさは、人と人をつなぐものになることもある。T子はこう書く。

「人の心の淋しさを見る時。冷たさを見る時。悲しい程の人間性の善良さと弱さを見る時。真実の自分の姿をはつきりと見る事が出来る。神の光を感じる事が出来る。その時に私は淋しいんだ。淋しいんだみんなが淋しいんだと涙ぐまずに居られない事を感じる。」

（同 38頁）

【望郷の念】

孤独感が増す一つの要因は、故郷が慕われることであつた。年若く肉親から離れて寮生活をする身では、学業や交友関係で困難にぶつかるたびに望郷の念が募つたであろう。実家への想いを綴つた文章は誌上に時折登場する。「あゝ、私は故里が懐かしくてたまらない。故里を眺めてはおもはず涙にかきくれ【る】のであります。私の家はあの奥羽山脈の蔭にあるのです。心のさゝやきは、始終『あの山越えてあの山越えて』といつて居ります。」

（齋藤きよ子 楸1 18頁） 当然ながら、こうした慕情は歌にもしばしば詠まれることとなる。

しもやけのいたさに一人ねむられず只故郷の夜を思へり（篤子 楸 9 120 頁）
舎の窓にもたれておれば何となう里の夕暮れ思ひ出さるゝ（美秋 楸 11 96 頁）
故里を遠くしのびつ文机にむかひてあれば母の面見ゆ（某生 楸 13 81 頁）
何時しかに暮れ行く空を眺めつつ遠き故郷しみじみ想ふ（S 楸 14 68 - 69 頁）
なつかしき故郷よりの小包に糸とく暇ももどかしきかな（同 69 頁）
故郷の友の便りの封切ればほのかに磯のかほり漂ふ（同）

思わぬところで故郷の母の愛情を思い出すこともある。「母の日」に学校で配られたカーネーションである。

母の日に紅のカーネーションを胸にさし母健やかにとはるかに祈る（水濱 [みきわ] 楸 14 73 頁）
たらちねの子を思ふ心をしのびつゝ夜毎の月に母をぞしたふ（同）

【死者を偲ぶ】

懐かしむものは故郷だけでなく、亡き肉親や友人のことも含まれる。身近な死者を偲ぶ歌は相当数を占める。実際に在学中に親兄弟を喪った人は少なくなかったであろうし、1932（昭和7）年1月に奈良で発生した電車・バスの衝突事故に巻き込まれて死亡した伊東文子（英文科3年生）のように、生徒が急逝することもあった⁵。収録されている文章の中にも、友の死に驚かされた体験を記した手記や追悼文、弟の死に寄せた詩文なども見られる⁶。死が日常の近くに存在していたことが感じられる。

何となくただなんとなく物悲しちゝ失なひし我身の秋は（野ぎく女 萩 2 60 頁）
いたつきの枕に寂し秋雨や逝きにし友のさゝやきに似て（しづ江 萩 4 37 頁）
去年の秋喜び迎へし師の君のはや在さぬがいとうら悲し（楸野葉子 楸 5 22 頁）
ぬば玉の黒きとばりにまたゝける星見る度に母ぞしのぼる（ゆり子 楸 6 26 頁）
花散ればちゞにくだくる我胸は亡き母上やなつかしみてん（加藤きよ 楸 7 56 頁）
去年の春思へば悲し亡き友の遊びてありし時にぞあれば（同 57 頁）
さめてなほ母の面影しのびつゝまくらつめたき明け方の空（菊子 楸 9 119 頁）
母さんと呼はんとすれば姿なく唯残れるは涙のみなり（百合子 楸 9 122 頁）

⁵ 「伊東文子さんを弔ふ」『楸』11号（1932年）、99-107頁。

⁶ 例を挙げれば：及川みつ「思ひ出の記」『萩の下露』4号（1914年）、16-17頁；美繪子「思ひ出と別れ」『楸』2号（1922年）、29-31頁；佐伯きん子「逝きし友」『楸』3号（1923年）、16-21頁；矢野恵智子「逝きし幸子さん」『楸』7号（1927年）、40-43頁；YS「逝ける弟に」『楸』7号（1927年）、58-61頁；遠藤緑「或る夜亡き弟を追憶して遠き友に送る」『楸』14号（1934年）、79-80頁。

亡き母のかたみとなりしこのはれ着短くなりて我は悲しき (みのり 同 120 頁)
音もなく降る雪の夜の静けさにおもひそ出づる母のおもかけ (英子 同 121 頁)
独楽遊び見る度毎にありし世の小さき弟を思ひだすなり (よしえ 同)
夕まぐれ小暗き空に只一人亡き母上を思ふ我かな (同)
窓越しにふる紛 [ママ] 雪をながめては永久に去りにし妹思へり (悦子 同 120 頁)
亡き兄の思ひ出なりし矢車の芽ばえ出でしと語る朝かな (S 榎 10 136 頁)
我ために夕餉とゝのふありしは [日?] の母の恵を憶ひ出でて泣く (緑瑤女 榎 10
138 頁)
昇り行く母のみたまを打ち狂ひ狂ひ呼べども詮なかりけり (同)
母といふ名のみ残れる一塊の冷たき石と変りたまひぬ (同)
愛の主にも母のみたまをゆだねつゝなほ涙する弱き身を泣く (同)
濱の子が拾ひてくれし貝がらは亡母上の指つめに似て (同 139 頁)
父あらば若し父あらばと思ひつゝ父てふ文字を書くぞわびしき (H・U 同 140 頁)
いまは亡き友のこころを忍びつつこよなく愛でしコスモスを祈 [折] る (S 榎 14
68 頁)
ほゝえみの消えぬほのかの面影を迫る夕べにうつしうかべぬ (同)
いつとなく心静まり亡き人を思ふ我かなけふもきのふも (工藤信枝 榎 16 35 頁)
おのがふむ落葉の音のなつかしき夕べの庭に父を偲びつ (志賀恭子 榎 21 24 頁)

死の影がさすこともあるため、身近な人の病には心が重くなる。

せ戸のびわ花咲きたりと云ひし日は君病み初めしその日なりとか (暁星 榎 7 55
頁)
紅の梅散る夕ふるさとながき病の友に逢はんとす (千葉綾子 榎 10 141 頁)
父やみてラヂオもかけずひつそりと淋しきまゝに日は暮れにけり (加藤清子 榎 14
83 頁)

やがて思いは、自らの死のことに至ることもある。

カチ／＼とセコンドのみは絶間なし此の世を去りて何処にぞゆく (ゆり子 榎 6 26
頁)

【信仰と祈り】

キリスト教校として、学校生活の中心に置かれているのが信仰と祈りである。寄せられた論説や随筆の中にも信仰について述べたものがしばしば見られる (批判的な声も含

まれる)。『橄欖』第8号以降は、前年夏に開かれた御殿場での基督女子青年会（YWCA）修養会に参加した生徒たちの手記も掲載されるようになり、会場で学んだ事柄や感想が披露されている。短歌の中にも信仰を扱ったものが少なからず存在する。下記の歌のうち、冒頭のものからはツリーとロウソクを飾った明治末のクリスマス礼拝の様子が見て取れよう。

常盤木の緑に映ゆる聖燭(みあかし)のもとに額伏せ祈禱りする宵（白鳩 萩2 57頁）
星清き夜なり静けき野にたちて神の聖旨（みむね）をたゝへつゝ居ぬ（同）
神の道ゆけどはるけし吾未だ召されぬものかこゝにまどひぬ（同）
二度（ふたたび）はそむかじとしも主にちかひてまたも破りて罪に泣く身や（同）
悪くとも悔ひたる時ぞ人の身は貴く光る器にぞある（加藤きよ 橄7 57頁）
苦しみの時のみたよる弱き身を投げすてまほしほろびの国へ（同）
雲よいざ雨よふれ／＼風も吹け我はひたすら天を仰がん（橘川静枝 橄8 65頁）
新しく尊き神に祈らまし雪つむ松に初日にほひて（同 65頁）
美しき星の光を身に浴びて今宵も静かに一人祈りぬ（T 同 67頁）
ほがらかに鳴く鳥の声きこゆなり神のめぐみの朝のきたれば（同）
一日のつとめをおへて祈る時神のめぐみのせまり来るなり（戸田春子 橄11 97頁）
信ぜじと口には言ひつ祈らではやまれぬ心悲しかりけり（同）

『橄欖』9号には、大病から回復したのか、試練の意味と自らの前途について思いめぐらす聖書科3年生の歌が7首掲載されている。

数多き数の中より数ならぬわれを選びし神の尊さ（千登世 橄9 115頁）
いかなればかよわきものを試むる慈愛の父の心知らず（同）
いとし子を愛すればこそ鞭うたむ聖き怒りはわれをつゝみぬ（同）
みむねなら苦き杯うけまほし君に従ふわれなればこそ（同）
宮城野に棄つるいのちは惜しからずただゆく道を照らせわが神（同）
癒されて学びの道にたちかえり心ゆくまで聖書に親しむ（同）
土くれにひとしき身をも棄てまさでとり上げ給ふ神のみめぐみ（同）

続くページに「死よ汝はいづくに在りや」と題して掲載されている一連の歌は、信仰告白をして洗礼を受けた生徒の作品のようにも見受けられるが、背景は定かではない。

あゝ吾れはうれしきかな主はじめてぞ君を喜ぶ吾れとはなりし（津多枝 橄9 116頁）

くろ土に萌え出し身のうれしきか吾れも同じぞ新しき身ぞ (同 117 頁)
天地はくしくもあるか宇津し身をあはせ給へりみ手のわざなれや (同)
あゝただ主許させ給へ吾が心みづからにのみ誘はれ来し (同)
今日のこのひと日を君に捧ぐこそ生けるいのちに如何にとほとき (同)
うれしきは此の天地を歩み来て君を見い出て吾れ慕ふこと (同)

『橄欖』13号に掲載されている聖書科生徒(某生)による4首の歌は、そのまま讚美歌になりそうである。

ぬばたまの、やみにさまよふ、羊らよ 心して見よ、「光」！輝く。(橄 13 81 頁)
行く道は、一筋なれど、弱きため 闇路に迷ふ、此の頃の我 (同)
うき事のすべてをイエスの十字架に まかせてたどらん、主の正道を (同)
ひたすらに、祈る心の静けさに 一日の罪もゆるさるゝ心地す (同)

『橄欖』14号には、父を喪ったT子が郷里から仙台に戻る列車の中で詠んだ14首の歌(「父みまかりて」1933年5月9日付)が載せられている。苦しみに向き合いつつも、神の導きに信頼を置いて歩み続ける堅固な信仰を表明するものとなっている。

野をも越え山をも越えて走り行く車窓にもたれ物思ふかな (橄 14 58 頁)
人生に死と云ふ影の巖然と地をば圧して立つを覚ゆる (同)
緑萌ゆ自然の姿眺むれど父亡き子にはいとど淋しき (同)
ハラ／＼と散り行く花の影を追ふ私の眼ぞ何時かうるみぬ (同)
都さし帰り行く身に幸ぞ待て父亡き子には凡て悲しき (同)
母上よあまりに早やく訪づれし [ママ] 悲しみ背負ひ歩み給ふか (同)
我が行手如何になるかは闇なれど神に託さん只信じつつ (同)
波よ立て嵐よ吼えよ恐れまじ死の影目指し我は進まん (同)
骨肉の情こそいとど尊とけれ我育くまん聖く正しく (同)
厳肅なる人生の岐路に物思ふ心ぞ永久に我のかたみそ (同)
終で耐え忍ぶ者は救はると宣ひし主を只信じ行く (同)
悩みをば背負ひつつ只に進み行く人の姿ぞ実に尊とけれ (同)
張りつめし心もややに弱り行く日も傾ぶける車内の一隅 (同 59 頁)
何事も忘れつ只に励まん光り輝く港目指して (同)

続く頁にT子は思索を書き連ねた後、4つの歌を書き添えている。

弱まれる我が身と魂をみな捧げ我は行きなん十字架の道（楳 14 60 頁）
幾度か逃れんとする心強まれど尚止め給う神の御愛（同）
萌え出づる若芽ぞほのかに匂ふなれ寒さ [き?] 冬にも春は迫りぬ（同）
人生とは激しき戦ひの営みぞ今日も歩まん光望つ（同）

【明るい日常】

とはいえ、生徒たちは人生の苦悩や葛藤ばかりを歌に託していたわけではない。屈託の無い日常、家族との胸あたたまる時間を描いた作品も見られる。

たのしげにひいふうみとお正月よび出たさる、羽子の音かな（節子 楳 9 121 頁）
尾をふりて我があとさきを馳けめくる犬もうれしき朝の草原（三枝 同）
我が張りし障子の手きはよく目立ち光まふしき冬の朝かな（ゆり子 同 120 頁）
なつかしき友のたまへる小さき壺花さしかへて一人ほ、ゑむ（とし子 同 119 頁）
雪女来るよと母にすかさし幼き時のなつかしきなか [ママ]（節子 同 121 頁）
叱られてなく、丘に来て見れば飛び立つ雁もあはれにそ見ゆ（とよ子 同）
梅の花画がきてありし茶碗をば求めかへりて心たのしき（S 楳 10 137 頁）
すぎし日の良きも悪しきも忘れよと寒空遠く除夜の鐘なる（H・U 楳 10 140 頁）
すや、とねむりについた弟はかはい、顔では、ゑんでゐるよ（岩佐清子 楳 14 83 頁）

始めての歌の言葉のむつかしき指折るのみに時はすぎ行く（伊藤京子 楳 14 82 頁）
けんくわして己れわると知りつ、も横目ににらむ妹のかほ（同）
まなびやに通ふ妹の足どりも喜びに満てり春日をうけて（馬場年子 同 84 頁）
はてしなく遠きみ空の七つ星今宵はことに仲よくも見ゆ（山田たい子 同）
自動車の立てし埃によごれたる庭の草木を父と洗ひぬ（小島弘子 楳 16 25 頁）
指折りて羞づかに微笑めり頬あかきをとめに我もなりにけるかな（和泉幸子 楳 19 67 頁）

沈々と秋はなつかし爐の端に母と対ひて栗を焼くなり（同）

【社会への反応】

『萩の下露』『橄欖』刊行の時期は、大正デモクラシー、女性参政権運動、関東大震災、東北凶作、満州事変等、緊張が高まりつつある時であった。しかしながら、概して社会の事象に対する関心は生徒たちの文章の中では強くない。このためか、短歌においても実社会の事柄に触れているものはほとんど登場しない。

1937（昭和 12）年 6 月 30 日、ヘレン・ケラーが仙台を訪れ、宮城女学校の生徒 150 名が仙台駅まで歓迎に赴いている。この日の夕と翌日に市公会堂で開かれた講演会には、専

攻部・高女部の生徒たちも出席した⁷。このイベントに対する在学生の反応は『橄欖』には登場しないが、同窓生（25期）の池田ふみが詠んだ4首の歌が『橄欖』19号に掲載されている。池田は、視覚障害を持つ友人と共にヘレンの講演会に出席していた。いささか表面的な内容ではあるが、ヘレンの生気に満ちた態度と独特の話しぶりが印象に残ったことが読み取れる。

盲聾啞の三苦を負へる人といふヘレンケーラーの面(おも)かがやかし（橄19 44頁）
さき [い] はひは感覚にのみ得られずとヘレンケーラーは壇上に叫びぬ（同）
三重苦を負ひつつも語るヘレンケーラーの奇しき声音に胸をつかれつ（同）
かたはらにそひて聞き入る盲目の友の涙をはじめて見たり（同 45頁）

『橄欖』21号には、日中戦争の戦況について触れた「黒蝶女」の歌が掲載されている。ラジオニュースに耳を傾け、軍事郵便を読む銃後の生活が描かれているが、敵味方を問わずに人命の喪失を悲しむ姿勢が救いとなっている。なお、「黒蝶女」は同じ号に、中国戦線に赴く途中に実家に宿泊した5人の兵士との交流体験を述べた文章を寄せており、その内容はこれらの歌とセットになっている⁸。

アナウンサーの声たかぶれり我もまた息つめて聞く戦況ニュース（橄21 13頁）
幾万の妻が母等が心凝らし今ニュース聞く姿しのばゆ（同）
敵味方いづれ問はなく今はたゞ人の命のかなしかりけり（同）
敵前三百五十米の濠の内月明かりにて書きしてふたより（同）
月を経て届けたより今にしておこせる人に恙有りや無しや（同）

同じ号に掲載されているこの歌も、出征した兵士の無事を祈るものであろう。場所は大崎八幡宮であろうか。

遠き子を守れと祈る垂乳根の柏手響く八幡の森（大竹利意子 橄21 24頁）

そのすぐ隣にこの歌が掲載されているのは、前途に立ち込める暗雲を漠然と感じているようにも見える。

⁷ 「六月三十日 ヘレン、ケーラー博士一行零時三十九分仙台駅着のため本校高女部三年生以下百五十名尚綱高女生と共に駅に歓迎す。専攻部生徒午後七時半公会堂に於ける講演を聴聞す。七月一日 午後二時高女部四、五年生生徒大越先生引卒[ママ]の下に公会堂に於けるケーラー博士の講演聴聞す。」『橄欖』19号（1937年）、126頁。

⁸ 黒蝶女「兵隊さんと達磨さん」『橄欖』21号（1940年）、13-16頁

吹く風の心のまゝに寄せて散る人の運命の悲しかりけり (和泉幸子 同)

【幻想と恋】

作品の中には、幻想の戯れから生まれたような歌も見られる。下に挙げた歌からは大正浪漫の絵、小川未明の短編などを思い起こす人もあろう。いささか芝居がかった加藤きよの「小箱の秘密」は、思わせぶりなイメージを醸し出したい作者の意図が丸出しで微笑ましい。鶉橋かつえは実際に断髪したのかも知れないが、モダン風のショートヘアにするためだったのではないだろうか。しかし、このように歌に詠まれると物語の一場面のように見える。

我が心紫色の衣きて春日のもとに大らかに舞ふ (Y子 榎2 45頁)

眠るごと否(また)平安を捧るごと城の上にたつあやしきかたち (江須愛 榎5 21頁)

謎秘めて幾千年かスフィンクスもだせるごとく我もしかなすや (同)

解けも得ぬ小箱の秘密だきしめてうなだれ勝ちのこの頃の我 (加藤きよ 榎7 56頁)

散りて行くダリヤの花へ口づけぬ泪ぐましきある日の我 (同)

ほのかなる我が思ひにもまさりたる月を生命の宵待ちの草 (宵町草 榎9 118頁)

やみをのみ生命と咲きたまゆりの寂しき花を許しませ君 (千葉綾子 榎10 141頁)

あげ舟によりて唱へるセレナーデ淋しき節に波はかなでり (緑瑤女 榎10 139頁)

一人来てはまなでしこを手折らんと松原ごしに夕汐を聞く (同)

たちきりしこの黒髪のスてかたく紙に包みてしまふ我かな (鶉橋かつえ 榎14 81頁)

時として恋歌のように読める作品も登場する。無論、これらは実在する異性の想い人を詠んだものとは限らない。「エス」に対する思慕の表現かも知れないが、生徒たちの憧れを描いた創作と見ることもできよう。

書いて消し消してはかきぬ君が名をあはれ消え行く真白き砂に (野菊 榎4 13頁)

君に似し人にあひたり晩秋の灯のちまたよひやみの頃 (俊 榎8 134頁)

ねもやらで落葉の音をきく夜はただ一すぢに君ぞなつかし (同 135頁)

うつり行く君が心を止め得ず君かうつしゑ淋しく眺む (W 同 64頁)

人の世のなべての律法如何にもあれ我は行かなん君が御胸に (同 65頁)

かすかなる落ち葉の音にまとはされ君かと思いいくたびか立つ (宵待草 榎9 118頁)

【結び】

以上見て来た作品以外にも、相当数の歌が『萩の下露』『橄欖』には掲載されている。四季折々の風景を詠んだものや年賀の祝歌等もあるが、ここでは紹介することができなかった。いずれも生徒たちの文芸創作の豊かさを覗かせてくれるものである。こうした作品は、オリジナリティや技巧という面では決して優れたものとは言い難いかも知れないが、公的な学校資料からうかがい知ることが出来ない女学生たちの内面世界や美意識を映した貴重な史料であり、他校の文芸雑誌中の作品と比較することができれば興味深い発見が期待できよう。今後は、生徒の手になる随筆や童謡などについても紹介して行きたい。

最後に、『橄欖』12号に掲載された高女部5年生（ペンネーム「すゞめ」）が卒業時に残したメッセージの抜粋と、『橄欖』7号に掲載された「AT」の歌一首をもって本稿を閉じたい。制約が多い中でも精一杯生きて来た生徒たちの熱気が伝わって来るようである。

学生時代—それはぴちぴちはねかへる飛び魚のやうに元気な、そしてピンクのカーテンで包まれて空間に絵をかくやうな朗らかな時代だ。喧嘩もよくする。先生にもお説教をよく承はる。目上の人から叱られるのは常習だ。それだけ又可愛がられるのも学生時代の徳だけれども。（略）

冷たい世間が何んだ。我等は飛び魚だ若い力で精一杯働いて彼処に生きる力を見出すんだ。それが学生生活で習った立派な結晶ぢやないか。何時も希望をもち現在に生きるのが学生の本分ぢやないだらうか。（すゞめ「巣立ち行く」 橄 12 70 頁）

あらたなる希望の花を胸に秘め勇みて進まんひとのまさみち （AT 橄 7 56 頁）